

<水稲の栽培ポイント>

1 生育状況

○今年は、平年並みの6月6日に梅雨入りし、6月29日に梅雨明けとなりました。平年より22日早く、昨年より7日早い梅雨明けになりました。麦あと移植の圃場では、平年よりも分けつの発生量が少ない状況です。強い中干しはせず、間断かん水を継続しましょう。

○今後、8月・9月の気温は平年並又は平年より高い確率がともに40%の予報が出ています。降水量は平年より多い確率が40%です。出穂期前後の水管理を丁寧に行い、乳白米・胴割米の発生を抑え、高品質を確保しましょう。

2 水管理

(1) 間断かん水の継続

水管理は、間断かん水の継続が基本です。今年は特に茎数が少ない圃場が多いので、干したりせず、茎数の温存に努めましょう。出穂期～開花期は最も水を必要とする時期です。水が不足しないよう湛水しましょう。

また、早期落水は登熟歩合の低下、品質の低下を招きます。落水は出穂後30日～35日頃を基本としましょう。

(2) 出穂後の高温対策

出穂後～出穂後20日に高温（最高気温32℃以上）が予想される場合には、乳白米等の発生を防ぐため、夕方のかん水により地温を下げ、根の活力維持を図りましょう。高温時の常時湛水は水温が上がり、根腐れが起こりやすくなります。

3 穂肥の施用

適期の穂肥は1穂の粒数を増やし、葉色の低下や枯れ上りを防いで粒の充実を促すなど、穂肥は収量や品質確保に重要です。葉色が淡く茎数が不足している場合は、下表の目安より2日程度早い追肥を行います。しかし、早めの追肥は倒伏を助長することもあります。また、多量施用や遅い施用は玄米中の粗蛋白質含有量を高めて食味を低下させるなどの悪影響を与えます。品種や田植え時期、圃場の肥え具合、稲の生育状況などに応じて、適期に適正な量を施用しましょう。

(1) 穂肥適期は下表のとおりです。

ただし、一発基肥（BBあさひの夢専用222など）を使用した場合は穂肥の必要はありません。

品種名	穂肥の時期	10a 当たり施肥量（肥料の例）
コシヒカリ	出穂の15日前 (幼穂長17mm)	窒素成分2kg前後 (NK-707号、NK-202号 10kg前後)
とちぎの星	出穂の15日前 (幼穂長20mm)	窒素成分2～3kg (NK-707号、NK-202号 10～15kg)
あさひの夢	出穂の18～20日前 (幼穂長2mm～8mm)	窒素成分2～3kg (NK-707号、NK-202号 10～15kg)

(裏面あり)

4 斑点米カメムシ類の防除対策

- (1) カメムシ対策は除草が基本です。出穂期10日前までに畦畔や水田周辺の雑草地の草刈りを行いましょ。特に被害の出やすい圃場では、出穂2～3週間前と出穂期頃の2回連続で草刈りをする「畦畔2回連続草刈」がおすすめです。
- (2) 穂揃期に斑点米カメムシ類が水田内で見られる場合は、乳熟初期（出穂期7～10日後）までに農薬を散布しましょ。その後もカメムシ類が見られる場合は、7～10日間隔で1～2回の追加散布を行いましょ。

※出穂期とは：全茎数の40～50%が出穂した日のことす。

※穂揃期とは：全茎数の80～90%が出穂した日のことす。

防除農薬の例

農薬名	希釈、散布量	使用時期	使用方法	使用回数
スタークル顆粒水溶剤	2000倍 60～150リットル/10a	収穫7日前まで	散布	3回以内
トレボンEW	1000倍 60～150リットル/10a	収穫14日前まで	散布	3回以内
スミチオン粉剤3DL	3～4kg/10a	収穫21日前まで	散布	2回以内(但し、出穂前は1回)

(農薬はラベルの表示を確認して正しく使用してください。)

5 縞葉枯病の増加と対策

- (1) 近年コシヒカリ等の罹病性品種で縞葉枯病の発生が見られます。縞葉枯病はゆうれい病ともいわれ、縞葉枯病のウイルスを保毒したヒメトビウンカがイネを吸汁することにより発病します。前期発病では葉が細くなって巻かれるゆうれい症状と、後期発病では穂の出すくみ症状が現れます。
- (2) 再生稲はヒメトビウンカの生息場所となる上、ウイルスの伝染源となります。翌年の伝染を防ぐためにも、収穫終了後は速やかにかつ丁寧に耕起しましょ。とちぎの星、あさひの夢など、縞葉枯病抵抗性品種を作付けしましょ。



(左) ゆうれい症状

(右) 穂の出すくみ症状

※新規需要米については、主食用米と同等の栽培管理を行いましょ。